現代日本文學大系

47

室生犀星
萩原朔太郎 集

筑摩書房

現代日本文學大系 47

昭和四十五年二月二十五日 初版第一刷発行
昭和四十八年四月二十日 初版第四刷発行

室生犀星・萩原朔太郎集

著者 室生犀星
萩原朔太郎

発行者 井上達三

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号一〇一―九一
電話東京(二九一)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷 株式会社 精興社
製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類)0392(製品)10047(出版社)4604

室生犀星集　目次

巻頭写真

筆蹟

抒情小曲集　三

愛の詩集　二三

かげろふの日記遺文　五三

性に眼覚める頃　一一七

或る少女の死まで　一五三

あにいもうと　一八五

舌を嚙み切つた女　一九五

鮠の子　二〇三

萩原朔太郎集　目次

巻頭写真
筆　蹟

月に吠える　一一三
定本青猫　一三九
純情小曲集　一六六
氷　島　一七六
新しき欲情（抄）　一八五
郷愁の詩人与謝蕪村　二四五

〔付録〕
晩年の父（抄）　室生朝子　二七一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

室生犀星　中村光夫　四〇三
父・萩原朔太郎（抄）　萩原葉子　四一四
「郷土望景詩」に現われた憤怒　中野重治　四二七
萩原朔太郎　室生犀星　四三三
年譜　四四〇
著作目録　四四八

室生犀星集

小景異情

室生犀星

ふるさとは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの
よしや
うらぶれて異土の乞食（かたゐ）となるとても
帰へるところにあるまじや
ひとり都のゆうぐれに
ふるさとおもひ涙ぐむ
そのこころもて
遠きみやこにかへらばや
遠きみやこにかへらばや

抒情小曲集

序曲

芽がつつ立つ
ナイフのやうな芽が
たつた一本
すつきりと蒼空につつ立つ

抒情詩の精神には音楽が有つ微妙な恍惚と情熱とがこもつてゐて人心に囁く。よい音楽をきいたあとの何物にも経験されない優和と嘆賞との瞬間。ただちに自己を善良なる人間の特質に導くところの愛。誰もみな善い美しいものを見たときに自分もまた善くならなければならないと考へる貴重な反省。最も秀れた精神に根ざしたものは人心の内奥から涙を誘ひ洗ひ清めるのである。

いとけなかりし日のおもひでに

室生君。

時は過ぎた。『抒情小曲集』出版の通知を受取つて、私は今更ながら過ぎ去つた日の若い君の姿が思ひ出される。初めて会つた頃の君は寂しさうであつた、苦しさうであつた、悲しさうであつた。初めて君の詩に接した時、私はその声の清々しさに、初めて湧きいでた同じ泉の水の鮮かさと歓ばしさとを痛切に感じた。君はまた自然の儘で、稚い、それでも銀の毳毛を持つた栗の若葉のやうに真純な、感傷家であつた。それは強い特殊の真実と自信と正確さを持つた若葉だ。その栗の木は日を追うて完全な樹木の姿となつた。日を追うて君自身本然の愛と啼泣と情念の発露とが激しくなつた。かう云つては悪いかも知れぬが、私は『愛の詩集』よりも此の『抒情小曲集』に、より深い純正を感じ愛着を感じ、追憶の快味をも感ずる。而して君の是等の小曲を初めて発見して少からぬ驚異にうたれた既往の私自身の姿さへ思ひ出す。君も私も既に華華しかつた青春は過ぎて了つた。憶ふと今昔の感に堪へぬ。

改めて云ふ。今度の小曲集こそ私の待ちに待つたものであつた。私は真に君の歓びを自分の歓びとして一日も早くその上梓の日を鶴首して待つ。

願くばわが室生犀星に再び光栄あれ。

八月十四日　小田原にて

北原白秋

抒情詩信条

1 汝の瞳孔いま微かなる運動を為す。空現はれたり。瞳孔全く開きつくしたる時汝は甚しく羽ばたきを為す。

2 汝は多くの人間の期待せるときに生れたることを信ぜず。願くば汝の上に真摯なるものの数個の批評をもつて汝の精神の糧をおくられむことを祈れ。

3 過ぎし日の愛人をおもふこと真に雪の下の若草を思ふに似たりとつげよ。

4 詩はわれにとつて永遠の宗教なり。

5 われ登らんとするとき崖より血しほ流れたり。

抒情詩信条

1 詩より詩作の瞬間を愛す。

2 祈れば樹の上の果実かつと鳴りて落つ。祈れば青きもの紅くなり形無きもの顕はる。

3 瞳と瞳とを合掌す。

4 山は静止す。そのさまざまなるものに富み胎めるかを見よ。真に生けるものの静けさを聴けよ。

5 爾のわれの接吻をうける時つねにつねに爾の輝くを見たり。

私にとつて限りなくなつかしく思はれるは、この集におさめられた室生の抒情小曲である。彼の過去に発表したすべての詩篇の中で、此等の抒情詩ほど、正直ないぢらしい感情にみちてゐるものはない。それは実に透明な青味を帯びた、美しい貝のやうな詩である。そしてそのリズムは、過去に現はれた日本語の抒情詩の、どれにも発見する

ことのできない珍しい鋭どさを持つて居る。そしてこの詩集は、北原兄の『思ひ出』以後における日本唯一の美しい抒情小曲集である。かういふ種類の芸術では、これ以上のすぐれたものを求めることは、今後とも容易にあるまいと思つてゐる。

萩原朔太郎

人間の手の五本の指は都ハレルムの花
壇にかつて咲いた珍らしい五弁の匂ひ
阿羅世伊止宇

ルイ・ベルトラン

君の第三の著作『抒情小曲集』が、上梓されるに就て、子供の時からの友達としての僕は、奈何なる言葉でこの喜びを表したらよいか、実にその術をしらない。ことに今度集められた小曲はみな其当時にとつて互に感銘の深いものばかりだ。君の詩のよいところは、敏感な美しい繊細な感情が概念的でなく、全くリズム的に本当と力とにあらはれてゐる所にあるのだらう。これを読んだ人人に本当に美しいよい感情を移植する所が一番貴いところではあるまいか……。

七月十七日　田辺孝次

雪のしたより燃ゆるもの
かぜに乗り来て
いつしらずひかりゆく
春秋ふかめ燃ゆるもの

自分は五月ころから原稿をまとめ初めて七月十二日の大颱風が都の空をおそうた夕方に総ての仕事を終つた。二百篇あまりあつた中から抜いてあとは棄ててしまつた。古い雑誌や小さい紙片や破れた原稿紙の綴りから掘り出すやうにして集めて見て胸の高まる気がした。ちやうどその時連日連夜の暴風が恐ろしい颱風となつて郊外に荒れ狂うた。小さい庭のダーリヤ・日まはり・菊などを微塵にしようとした。一丈余も伸びた日まはりの葉は裂けて穴だらけになつた。けれども倒れずに最後までしつかりと大地の底にしがみついてゐた。自分はこの日原稿を綴ぢあげて作曲家にてがみを書いた。そしてこの本を街に出したり友人の机上に置かれることを考へて酷く緊張した。

自序

私は本集に輯めた詩を自分ながら初初しい作品であること、少年の日の交り気ないあどけない真心をもつて書かれたことを合せて、いくたびか感心をして朗読したりした。ほんとに此詩集にある小品な詩は、恰も『小学読本』を朗読するやうに、率直な心で読み味つてもらへれば、たいへん心うれしく感じる。このやうな幼ない「抒情詩時代」が再び私にやつて来るものでもなく、また、それを再び求めることも出来ないことを知つてゐる。人間にはきつと此「美しい抒情詩」を愛する時代があるやうに、だれしも通る道であるやうに、ほんとにこれらの詩をあつめて置きたいと思つたのも、みなここにあるのだ。

この本をとくに年すくない人人にも読んでもらひたい。私と同じい少年時代の悩ましい人懐こい苛苛しい情念や、美しい希望や、つみなき悪事や、限りない嘆賞や哀憐やの諸諸について、よく考へたり解つてもらひたいやうな気がする。少年時代の心は少年時代のものでなければわからない。おなじい内容は私のこれらの詩と相合してそして、初めて理解され得るやうに思ふ。みながみなで感じる悩ましさや望を追ふ心は、きつと此中でぶつかり合ふやうに思ふ。

誰でも云ふ「少年時代は楽しかつた」と、「少年は神より人間より最つと別な神聖な生物だ。」とドストイエフスキイも云つてゐる。若若しい木のやうに伸びゆく力は、ほんとにあの時代に限つて横溢してゐる。頭のよい「頭のいちばん幸福な」時代だ。いちど見たり感じたりしたら、それにすぐ根が生え、植

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ゐ込まれる時代だ。

私はいまでも感じる。

少年時代に感じた季節の変移の鋭い記憶とその感覚の敏活とは、ほんとに何にたとへて言つていいか解らない。まるで「触り角」のある虫のやうに、いつもひりひりとさとり深い魂を有つてゐるものだ。それはまだ小児の時代の純潔や叡智がそのまま温和にふとり育つて、それが正確に保存されてゐるからである。「小児に就て人に接することを学べ小児は未だ汚されず、小児にとつては人みな同じ」とトルストイも言つてゐる。

私は雪の深い北国に育つた。十一月初旬のしぐれは日を追うて霙となつてそして美しい雪となり山や野や街や家家を包んだ。町の人人は家家の北に面した窓や戸口を藁や蓆をもつて覆うた。

道のふた側に積まれた雪は、屋根とおなじい高さにまでなつて、夜は窓や戸口の雪の、中から燈灯が漏れてゐた。戸外運動といふものが雪の為めに自然なくされてゐた子供の私らは、いつも室に坐つたり暖炉にあたつたりして、恐ろしい吹雪の夜を送つてゐた。そのころ私は俳句をかいたりコマ絵をかいたりして、自然にたいする心をだんだんに開いてゆくやうになつてゐた。極度に人懐こい、もの恋しげな心を不断に有つてゐた私は、また一面に於ては烈しい一人ぼつちが好きであつた。本をよんだり物を考へたりしたあと、よく自分で自分が作つた甘美な哀愁にひたりながら、雪あかりのする窓際で「子供らしくない」事を考へてゐた。それが私だち少年のいつも隠れてする心の隠れ家みたいに楽しく又悲しいものであつた。

四月まで続く降雪を我慢しきれないやうに、雪の下では春の浮動するものが生き初めるころは、わけても悩ましい力がからだに湧いてくるのであつた。私だち少年らは、おたがひに女の子のやうな深い情愛をかんじ合つて、かく詩や俳句の対象はいつもそれらの友に於て選んだ。美しい少年の友だちらは、ある時は、詩のことを話したりして、熱い握手や接吻をしたり、蒼い日暮の飽くことをしらない散歩をしたりしてゐた。

私どもは、そこここの散歩や、草場のあたりでいろいろな詩をうたつた。風のやうにうたひながら自分でつい感心してしまつて、ほろりとするといふやうなこともあつた。見るものが悲しくひしひしと迫つてくるのであつた。あの何物にもたとへることの出来ない、弱弱しい美しいセンチメンタルな瞬間に、私どもは、自分が其処に生きることを幸福に考へ、また必然さうあるべきことが自分らの若い使命のやうに、この全世界でいちばん偉い詩人ででもあるやうに考へてゐた。謙譲やはにかみもなかつた。傲慢と自愛とにたえず圧倒されてゐて、それを当り前のやうに思つてゐた。それほど、世間の本をよまない仲間にたいしては遠慮がなかつた。

私は抒情詩を愛する。わけても自分の踏み来つた郷土や、愛や感傷やを愛する。「くちばし青き小鳥」の囀りは可愛い。それを讃へたい。人間にたつた一度より外ない時代を紀念したい。それをそのまま次ぎに味ひつつある若い人人らの胸にたたみ込んで置きたいと思つてゐる。

もとより詩のよいわるいはすききらひより外の感情で評価できないものだ。これらの詩がどれほどハアトの奥の奥に深徹してゐるかについて、今私は何もいへないけれど、人人はきつとよき微笑と親密とを心に用意して読んでくれるだらうと思ふ。むづかしい批評や議論ぬきの「優しい心」で味つてくれるだらうと思ふ。それでこそ私がこの本を世に送り出した甲斐のあることを感じるのだ。

一月に『愛の詩集』を出してからもう一年に近くなる。『愛の詩集』まで歩んだ自分を知るにはどうしても此の「抒情詩時代」の自分をも知つてほしくおもふ。自分にもなほ美しい恋を恋したり、甘美な女性的なリズムを愛したりした時代のあつたことを物語りたいのである。ほんとはこの『抒情小曲集』は『愛の詩集』と併せて読んで、僕の心持のたてとよこに縒れ込んだリズムをほぐして見て

ほしいのだ。よく読んでくれる人人は、この小曲集の終りのペエジに近づいてゆくごとに、だんだんに人間の感情がひびれたり、優しく荒れて行つたりしてゐることを考へてくれるだらう。風にいためられた生活の花と実とを今まとめて見ることを嬉しく悲しく思ふ。

千九百十八年七月十三日
郊外田端にて

室生犀星

『抒情小曲集』覚書

年譜

二十歳頃より二十四歳位までの作にして、就中「小景異情」最も古く、「合掌」最も新しきものなり。時折の心持ちによりて五年間の春秋の季節の詩は入り乱れたるも、出来得る限り年譜は正しく編しぬ。

創作地

郷里金沢市千日町雨宝院といへる金比羅神社、寂しき栂、榎の大樹に寺領の四方はとりかこまれ、昼なほ暗き前庭のほとり極めて幽遠なり。その奥の間よりは直ちに犀川をのぞむ。美しき清流寺院の岸を灑ひて夏といへども涼しきことかぎりなし。川を隔てて医王、戸室の山さては遠く飛騨の連峰をも望むことを得。

野及び散歩の地として

最も好みしは犀川べりなる蛤坂新道、下つては犀川鉄橋のほとり等。これらの地は絶えず予の若き其頃の胸裡を去来して、シーズンの移り変り目ごとには高き鼓動を覚えたるものなり。「秋思」は有名なる兼六公園にての作にして、園の入口なる青く柔かき芝生の生えし様、其の色いまも忘れがたきものの一つなり。

旅行

京都、上州前橋市近郊に旅せし時の作、及び「足羽川」の一篇等なり。足羽川は越前福井市を流るる川なり。京都よりの帰るさにここ福井の街に約一ケ月ばかり滞在せし事のあり、その時になれる詩にして、美しき足羽の川の土手の上の、若き桜樹はいまも尚春くる毎に花咲けりときく。なつかしき事のきはみ。旅行は凡て予が幼き日の我儘なる事より、慈愛あつき父母にそむきての事なりき。今ははや父もみまかりて世に空し。哀感極まりなし。

上州前橋には三度ゆけり。ここにて予が畏友萩原を知る。小出磧といへる利根の河畔、小さき砂山、櫟の若き林、牧牛、赤城山、公園等、皆予が心に今もなほ生けり。旅はおもしろけれどもはかなく哀し。利根の砂山、氷の扉、さくらと雲雀、土筆、前橋公園の五篇を得たり。（外になほ数多けれども収録せず）

海浜

海の詩はすべて金沢市より二里を隔つる金石といへる所にて作る。ここは二千戸を数へ人心すべて質純なり。町より五丁程を隔てられて釈迦堂といへる僧院あり。静かなる院にして有名なる銭屋五兵衛の墓碑あり。ここのとある一室に一年有余転地療養せしことあり。院は砂丘の陰、涼しき松林のはづれにありて、お花畑よりいでて町に通ず。予ここにてはじめて『屋上庭園』を友白秋より送らる。此頃より予が詩の心やうやく動き且つ固められたり、かへりみればもはや十一年を閲しぬ。世にも静かにして、優しく、美しき尼僧らによりて、病気の予は毎日新しき野菜と、親切にして充分なる静養を与へられたり。友萩原もまた、遠く前橋市より来りてこの寂しき僧院を訪づれぬ。時は大正四年五月のことなりし。ここにてはかもめ、海浜独唱、砂山の雨、魚とその哀歓、松林の中に坐す、砂丘の上、静かなる空、水すまし等を得たり。

降雪

十月下旬より時雨となり、十一月終りは冷たき霙となる。霙となりて永き冬に入れば漸て霰となり、雪となる。二三尺も積るは例年の事にして、時に丈余にもなる事ありて、犬等

は皆屋根の上にて遊び戯る。雪降れば却つて温かく、人人は夜炬燵を囲みて団欒す。雪降れど霰凍れども故郷の冬は忘れがたかり。

暗黒時代

小曲集第三部は主として東京に於て作らる。本郷の谷間なる根津の湿潤したる旅籠にて「蟬頃」の啼く蟬のしいいといへるを聞きて、いくそたび蹉跌と悪酒と放蕩との夏を迎へしことぞ。銀製の乞食、坂、それらは皆予の前面を圧する暗黒時代の作なり。幾月も昼間外出せずして終夜なる巷にゆき、悪酒にひたりぬ。その悔新しくしてなほ深くふけりてゆきぬ。今も尚思ひ見て予の額を汗するものはこれなり。或る時は白山神社の松にかなかなの啼くをきき、上野に夜明けの鐘をききては帰りぬ。合掌のあとさきはじつに病気ともたたかひし時代なりしなり。

発表について

これらの抒情詩は曾つて雑誌『感情』第二号第三号にまとめて発表したるが、その以前雑誌ザムボア・スバル・詩歌・創作等にのせたるものなり。

（これらは一九一八年六月十八日の覚書なり）

われら少年の日の友とみないまは寂しくかたるへし

小曲集箴言

一部

小景異情

その一

白魚はさびしや
そのくろき瞳はなんといふ
なんといふしをらしさぞよ
そとにひる餉をしたたむる
わがよそよそしさと
かなしさと
ききともなやな雀しば啼けり

その二

ふるさとは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの
よしや
うらぶれて異土の乞食となるとても
帰るところにあるまじや
ひとり都のゆふぐれに
ふるさとおもひ涙ぐむ
そのこころもて
遠きみやこにかへらばや

遠きみやこにかへらばや

その三

銀の時計をうしなへる
こころかなしや
ちよろちよろ川の橋の上
橋にもたれて泣いてをり

その四

わが霊のなかより
緑もえいで
なにごとしなけれど
懺悔（ざんげ）の涙せきあぐる
しづかに土を掘りいでて
ざんげの涙せきあぐる

その五

なににこがれて書くうたぞ
一時にひらくうめすもも
すももの蒼（あを）さ身にあびて
田舎（ゐなか）暮しのやすらかさ
けふも母ぢやに叱（しか）られて
すもものしたに身をよせぬ

その六

あんずよ
花着け
地ぞ早やに輝やけ
あんずよ花着け
あんずよ燃えよ
ああ　あんずよ花着け

旅途

旅にいづることにより
ひとみあかるくひらかれ
手に青き洋紙は提げられたり
ふるさとにあれど
安きを得ず
ながるるごとく旅に出づ
麦は雪のなかより萌（も）え出で
そのみどりは磨（と）げるがごとし
窓よりうれしげにさしのべし
わが魚のごとき手に雪はしたしや

京都にて

にほやかに恋ひぬれど
さめゆくものはつめたかり

わが心は哀憐（あいれん）にみちわたり
もののそよぎに泪（なみだ）おちむとす
雪の青きを手にとれば
雪は哀（かな）しくなじみまつはる
かばかりふかき哀憐のもよほしに
いまぞ涙ことごとく流れもいでよ

流離

わが朝のすずしきこころに
あざやかなる芽生のうすみどり
にがかれど
うれしや沁（し）みきたる
こよなきいそしみをもて
青くしつかなる洋紙をこそのべにけれ
そは巡礼のうたごゑをきくごとき
わがきさらぎの哀調にして
わかれむとするふるき都に
とどまりもえぬ心なり
ああ　よく晴れあがりし空のもと
わが旅のをはりにや
小鳥すくみごゑして消えもゆくなり

木の芽

麦のみどりをついと出て
ついともどれば雪がふり
冬のながさの草雲雀
あくびをすれば
木の芽吹く

祇園

祇園の夜のともしびに
青き魚さへ泳ぎ出づ
青き魚さへをどるにや
加茂川べりのあたたかさ
飯もたべずにわがうたふ

夏の朝

なにといふ虫かしらねど
時計の玻璃のつめたきに這ひのぼり
つうつうと啼く
ものいへぬむしけらものの悲しさに

寺の庭

つち澄みうるほひ
石蕗の花咲き
あはれ知るわが育ちに
鐘の鳴る寺の庭

旅上

旅にいづらば
はろばろと心うれしきもの
旅にいづらば
都のつかれ、めざめ行かむと
緑を見つむるごとく唯信ず
よしや趁はれて旅すこころなりとも
知らぬ地上に印す
あらたなる草木とゆめと唯信ず
神とけものと
人間の道かぎりなければ
ただ深く信じていそぐなりけり

三月

うすければ青くぎんいろに
さくらも紅く咲くなみに
三月こな雪ふりしきる

雪かきよせて手にとれば
手にとるひまに消えにけり
なにを哀しと言ひうるものぞ

君が朱なるてぶくろに
雪もうすらにとけゆけり

足羽川

あひ逢はずよとせとなり
あすは川みどりこよなく濃ゆし
をさなかりし桜ものびあがり
うれしやわが手にそひきたる

わがそのかみに踏みも見し
この土手の芝とうすみどり
いまふゆ枯れはてていろ哀しかり

われながき旅よりかへり
いま足羽川のほとりに立つことの
なにぞやおろかにも涙ぐまるは

ふるさと

雪あたたかくとけにけり
しとしとしとと融けゆけり
ひとりつつしみふかく
やはらかく
木の芽に息をふきかけり
もえよ
木の芽のうすみどり
もえよ
木の芽のうすみどり

犀川

うつくしき川は流れたり
そのほとりに我は住みぬ
春は春、なつはなつの
花つける堤に坐りて
こまやけき本のなさけと愛とを知りぬ
いまもその川のながれ
美しき微風ととも

蒼き波たたへたり

みやこへ

こひしや東京浅草夜のあかり
けさから飯もたべずに
青い顔してわがうたふ

わがうたごゑの消えゆけば
うたひつかれて死にしもの

けふは浜べもうすぐもり
ぴよろかもめの啼きいづる

寂しき春

したたり止まぬ日のひかり
うつうつまはる水ぐるま
あをぞらに
越後の山も見ゆるぞ
さびしいぞ

一日もの言はず
野にいでてあゆめば
菜種のはなは波をつくりて

いまははや
しんにさびしいぞ

利根の砂山

風吹きいでてうちけむる
利根の砂山、利根の砂山
赤城おろしはひゆうひゆうたり
ひゆうたる風のなかなれば
土筆は土の中に伸ぶ
なにに哀しみ立てる利根の砂山
よしや、すてツきをもて
君が名をつづるとも
赤城おろしはひゆうとして
たちまちにして消しゆきぬ

氷の扉

たちまちに雪光る山なれ
たちまち鳴りてはくもる山なれ
四方の氷の扉ひらかれ
いつさいは萌えむとす
この国の草草のなよらかならむことの
けふはしきりに祈らる
この国の草草と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com